蚊のはなし－病気との関わり

上村 清 編

2017 年・朝倉書店発行

価格（本体 2,800 円＋税）

評者　酪農学園大学教授　浅川満彦

大学（学校ではない）は研究（論文）を基盤に教育（授業）をする場なので，どっかから借りてきた情報だけで授業をでっち上げるのは，たとえ，イノセントな学生による授業アンケートの結果が芳しくとも，確実に望ましくはないし，そういうセンセイは「おしゃべり袋」と揶揄される。それで，評者なのであるが，獣医寄生虫病学を教育する立場となって 33 年間，蚊自体を扱った論文実績は皆無。しかし，この科目には，当然，蚊を含む衛生動物に関するものもあり，憂鬱にさせてくれる。確かに，蚊を含む双翅目（本書では「ハエ目」）昆虫が中間宿主となる糸状虫（フィラリア）類はあるが，やや弱いかな。国立環境研究所と共同で実施したフラビウイルス科の鳥獣疫学は明確に直結するので，それを免罪符にしているが，でも，何か違うよなあー。このように猛烈に後ろめたく，情けない気持ちで，毎回，教壇に立っている。でも，仕方がないので，せめて授業台本は，最新かつ信頼のおける書物を底本にするしかあるまい。たとえば，本書のような…。

そもそも評者のなんちゃって講義を聴講せずとも，学生独り本書を読み込むだけで，蚊に関して講ずべきすべての情報－すなわち，分類・鑑別法（第 1，4 および 5 章），生態（第 2 章），生理（第 3 章），感染症（第 6 章），防除（第 7 および 8 章），調査法（第 9 章）－を吸収できるはずだ。巻末には引用文献表や国産のカ科一覧表もあり，これも深い独習には有益である。文体は一般向けも志向しているのでこなれ，図や写真も豊富で美しい。冒頭の口絵（写真）も見事で，フォーカスが大甘のものも含まれているが，ひょっとしたら，敢えてピンボケしているのではないかと真剣に訝ってしまった。各章にはコラムがあり，飽きさせない。恥ずかしながら，「蚊の日」制定や豊富な蚊の化石の存在など初めて知った。しかし，コラムについて敢えて注文をするならば，蚊と一緒に教えないとならないブユやヌカカについての話題も欲しい（ヌカカは，先ほどの化石のところで名前だけ出てきたし，ガガンボとユスリカは別にコラムがあったが…）。また，本書は医学系であるため，感染症の章には鳥マラリアや犬糸状虫などについては記述されないので，次回は，獣医学関係者も執筆陣に御加えいただき，ぜひ，これら動物感染症についても盛り込んで欲しい（そして，より一層の円滑な授業運営にご協力を）。